

近代文学研究叢書

第二十四卷

昭和40年12月5日 初版印刷
昭和40年12月20日 初版出版
昭和45年11月20日 増訂第2版印刷
昭和45年11月25日 増訂第2版出版

[¥ 2 5 0 0]

著者	発行者	印刷者	発行所
昭和女子大学近代文学研究室	東京都世田谷区太子堂一〇七 小林寅次	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶原忠幸	東京都世田谷区太子堂一〇七 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座東京一七〇八六七 電話(位)五一三一三八番

近代文学研究叢書

第二十四卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉村本保人濱能成内辻玉島山佐笹佐坂木河片荻太石石

田松間 見徳勢瀬 井田 藤澤 々本 原 鱗桐 田井森田
坂 藤村 宮 木由俣 井
澄定久 圓太頼正 幸謹 幹美 實顯 三磯延吉
八五 泉

夫孝雄都吉郎賢勝濯鑑助二允二明郎郎修英智水郎吉男貞

(国語学) (近代文学) (近代文学) (国文学) (近代文学) (美学) (国語学) (近代文学) (国文学) (英文学) (国文学) (比較文学) (英文学) (国文学) (独文学) (国文学) (英文学) (和歌文学) (歴史学) (俳文学) (比較文学) (英語学) (児童文学) (国文学)

口 繪 写 真

石 小 大 服 木

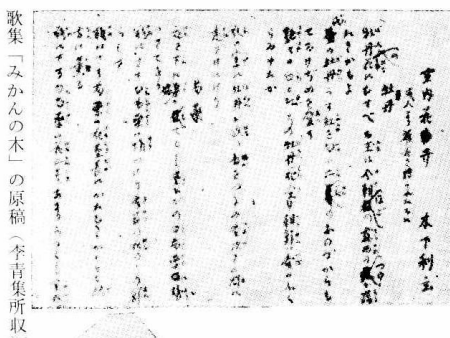
橋 栗 町 部 下

忍 風 桂 躬 利

月 葉 月 治 玄

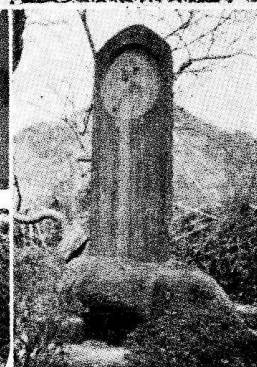
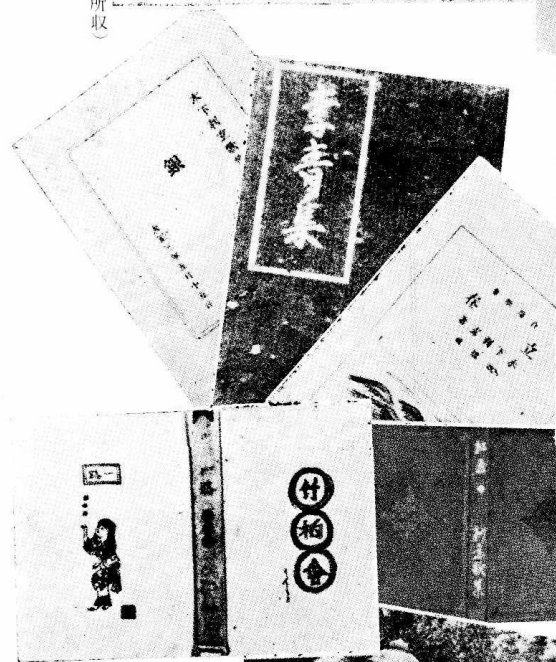
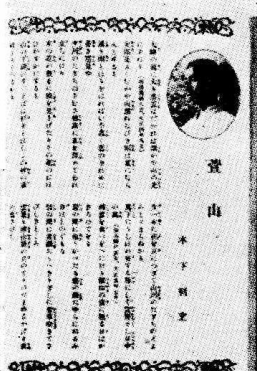
木下利玄

利玄肖像



歌集「みかんの木」の原稿（李青集所収）

「白樺」―大正四年十月所載の歌（昭和女子大学蔵）



近水公園（木下邸跡）内にある歌碑

←岡山県吉備郡足守町の木下家
菩提寺大光寺にある利玄の墓

歌集「路」―大正十三年十二月刊（昭和女子大学蔵）
歌集「紅玉」―大正八年七月刊（木下照子氏蔵）
中段左「歌集（銀）」―大正三年五月刊（昭和女子大学蔵）
歌文集「李青集」―大正十四年十二月刊（昭和女子大学蔵）
自選歌集「立巻」―大正十四年五月刊（昭和女子大学蔵）

服 部 躬 治

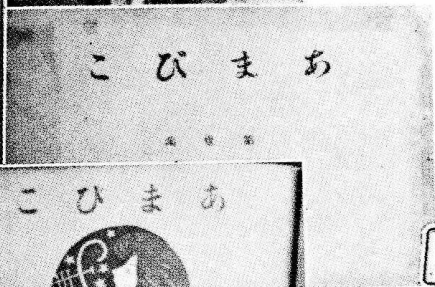
詩歌集「あまびこ」第一集—明治三十七年

十月刊

「あまびこ」第二集—明治三十八年刊

(昭和女子大学蔵)

射治肖像



上段中―躬治の直筆短冊

躬治晩年の住居、福山莊本郷丸山福山町にあった。



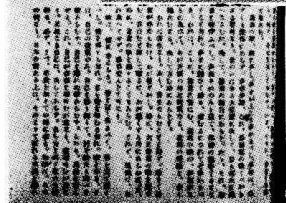
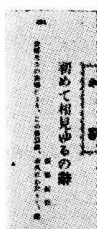
歌集「迦具土」——明治三十四年七月

刊
(昭和女子大学蔵)

「初めて相見ゆるの辞」 文庫明

治三十四年二月所載

(昭和女子大学蔵)



「恋愛詩評釈」——明治三十三年十一月刊（昭和女子大学蔵）

大町桂月

二月刊 (昭和女子大学蔵)

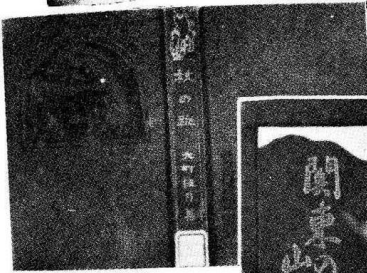
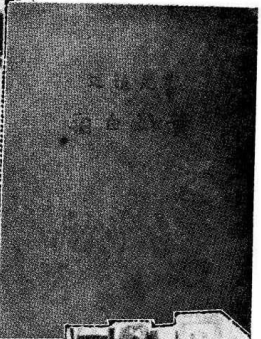
年六月刊、「雲のゆくゑ」大正六年九月刊、「行雲流水」明治四十二年四月刊、「少女と山水」明治三十八年一月刊 (昭和女子大学蔵)

中段中「内地雑居と国語」文芸倶楽部三十一年二月所載 (昭和女子大学蔵)

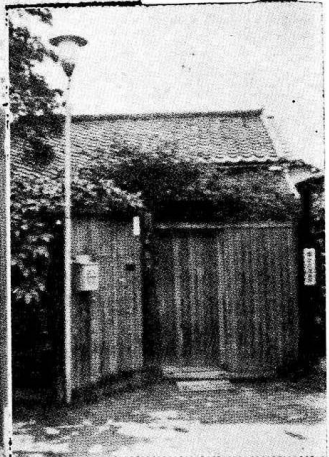


桂月晩年の肖像
桂月筆跡「冬籠帖」大正十四年六月刊

(大町久世氏蔵)



「関東の山水」——明治四十二年四月刊 (昭和女子大学蔵)
「杖の跡」——大正五年十二月刊 (昭和女子大学蔵)
上段中「日本文学史」——明治四十三年五月刊 (昭和女子大学蔵)

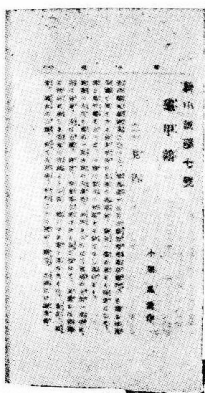
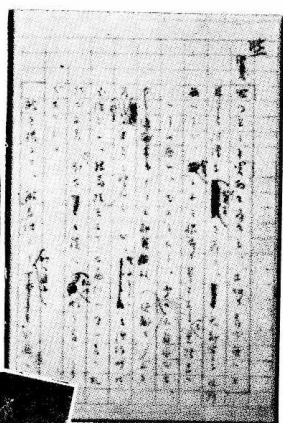


小栗風葉

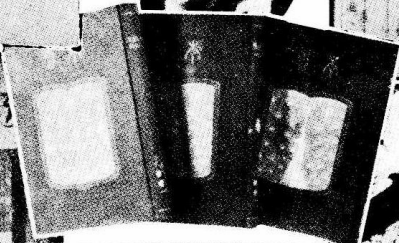
風葉肖像



「恋さめ」原稿の一部（岡保生氏蔵）



出世作「亀甲鶴」——新小説明治二十九年十二月
所載（昭和女子大学蔵）
「片多くぼ」——明治二十八年六月刊
（昭和女子大学蔵）



↑ 生誕の地愛知県半田市にある記念碑



「恋慕ながし」——明治三十三年
五月刊（昭和女子大学蔵）



中央二段「青春」三卷——明治
三十九年一月——三十九年十
一月刊（昭和女子大学蔵）
中央三段「天才」——明治四
十一年三月刊
（昭和女子大学蔵）
戸塚御殿といわれた風葉の
居宅（府下戸塚村字戸塚五）
中央立てるは風葉

石橋忍月

処女作「捨小舟」——明治二十一年五月刊
 (昭和女子大学蔵)
 小説「惟任日向寺」——明治二十八年十二月刊
 (昭和女子大学蔵)



白筆短冊 (大村富美子氏蔵)
 上段中、長崎時代の忍月 (大村富美子氏蔵)
 「舞姫」——国民之友二十三年二月所載
 (昭和女子大学蔵)



中段中、続案小説「黄金村」——明治二十五年一月刊「聚方十種」所収 (昭和女子大学蔵)
 中段中、小説「お八重」——明治二十二年四月刊 (昭和女子大学蔵)



養父のために忍月が建てた家
 (福岡県八女郡福島町に現存)
 ←福岡県福島町の無量寿院本堂裏にある忍月の墓



目次

口	第二十四卷の成立	昭和女子大学近代文学研究室：(一〇)
凡	例	昭和女子大学編集室：(一五)
木	下利玄	近代文学研究室：(一七)
服	部躬治	近代文学研究室：(八七)
大	町桂月	近代文学研究室：(二三)
小	栗風葉	近代文学研究室：(二五)
石	橋忍月	近代文学研究室：(三九)
近代	文芸年表(24)	近代文学研究室：(四三)
卷	末付記	近代文学研究叢書編集室：(四三)
年	表補遺	近代文学研究叢書編集室：(四六)

第二十四卷の成立

本巻には大正十四年二月から同十五年二月までに歿した左記五名を収めることにした。

木下利玄は明治十九年一月一日、岡山県賀陽郡（現吉備郡）足守町に旧足守藩主子爵木下利恭の弟利永と母やすの二男として生まれた。木下家は豊臣秀吉時代からの名門で、江戸時代初期に歌人として有名な木下長嘯子が出ている。伯父の家に嗣子が無かったので五歳の時その後を嗣いだ。明治二十四年学習院初等科に入学、同級に武者小路實篤などがいた。遠く父母の許を離れ東京の邸で淋しく暮したが、中等科に進むころから明るい性格になった。この頃から和歌や俳句に興味を持つようになり、十三歳の時佐佐木信綱を訪うて竹柏園に入門した。三十九年高等科を二番で卒業、九月東京帝国大学国文科に入学、英文科にいた志賀直哉と漱石の講義を聴いたりした。四十年四月十四日志賀直哉、武者小路實篤、正親町公和らと十四日会と称して合評会をはじめたが、そこから回覧誌「望野」が生まれ、のち「白樺」と改題して四十三年四月から毎月発行した。四十四年卒業。四十五年「空穂歌集」を読み大いに啓発されて従来のマンネリズムを脱した。更に白秋の「桐の花」の影響を受け格調、用語の上に独自の世界を開拓して行った。小説を書くことが当時の流行であったが彼は一筋に和歌の道を歩いた。大正十四年二月十五日四十歳の生涯を閉じた。

服部躬治は明治八年三月二十八日、福島県岩瀬郡須賀川字東（現須賀川市本町）に父直太郎、母セイの長男として生まれた。須賀川は芭蕉が「風流の初や奥の田植うた」と詠じたところ、芭蕉の友人相良等躬の出た地でもある。躬治の家は商家であったが祖父も父も風流を愛した。明治三十年九月二十二日、家督を妹に譲って上京、国学院に入學した。彼は当時の書生気質にはなじまず、いつも図書館でこつこつ勉強していた。在学中に文部省の中等教員検定試験に合格、学校を中退して落合直文の家に寄寓し、直文の中等学校用国語教科書の編纂を手伝った。歌人としての活動は三十一年六月三十日に出版した「いかづち会」に参加したことからはじまる。

三十三年四月、跡見女学校の教師となり源氏物語を講じたり同校の機関誌「汲泉」の歌合せの判者をしたりしていた。十一月「恋愛詩評釈」を出版。翌年一月「文庫」の投稿歌選者にえらばれ、五月に結婚、七月処女歌集「迎具土」出版。この歌集は与謝野晶子の「みだれ髪」と共に歌壇の注意をひいた。三十七年四月内海月杖と「女子国文学会」をおこし、上田敏、尾上柴舟らを講師に招聘して女子の教養と趣味の向上をはかった。落合直文は彼の生涯の師であったが、その歿後直文を記念して鉄幹、月杖らと「木枯会」をおこし「萩の家追悼録」「萩の家遺稿」等を編纂した。三十八年九月明治大学講師に迎えられ四十二年七月まで在任。晩年に歌作を離れて辞書の編纂や万葉集の研究に没頭していたが、関東大震災のためにその研究も灰燼に帰し、家を失った彼は一時故郷須賀川に難を避けていたがやがて帰京。高円寺から本郷丸山福山町（現文京区白山町）の下宿福山館に移り、大正十四年三月六日福山館の狭い一室で孤高の生涯を閉じた。享年五十歳。躬治に師事した折口信

夫は「義人の倅もあり、又殆、高士と謂ってもよい人から」と追慕している。

桂月大町芳衛は、明治二年一月二十四日高知市北門筋に父通、母糸の三男として生まれた。家は代々山内藩に仕えて百五十石お馬廻り役をつとめていたが廃藩置県で祿に離れ、いろいろの商売をやってみたが悉く失敗、明治十三年に父は死亡、桂月は母に伴われて上京し軍人の叔父の許に身を寄せ、番町小学校に通う傍ら山本塾で漢学を修めた。吃音で近視であったため軍人を断念し、政治家を志して十九年九月第一高等中学校に入学したが本科に進む時は文科に転じた。当時は西洋崇拜の反動として国粹思想が強くおこった時で、彼もその風潮に影響されて国文学を選び、落合直文に師事して浅香社に出席し、そこで塩井雨江をはじめ多くの友を得た。二十六年帝国大学国文科に入学。二十七年雨江の妹長と結婚。二十八年一月「帝国文学」創刊号に作品を発表し、四号からは役員の一人として編集の傍ら流麗な美文や紀行文を発表した。二十九年七月卒業。十二月雨江、羽衣と合著で美文韻文集「花紅葉」を出し五十数版を重ねて出世作となった。三十三年博文館に入り「太陽」「文芸倶楽部」「中学世界」に毎号時事問題、教育論、文芸批評と多彩な筆を揮い、意気軒昂たるその文章は強く青年の心を捉えた。この頃が桂月の文筆生活の最高潮期であった。三十九年博文館を退いてからは定収入を失い生活は次第に不如意になり、遂に借金で家財一切が競売に付せられる苦境に陥ったが、悠々として各地の名勝を探訪していた。四十三年五月富山房の雑誌「学生」の主筆となり、気迫と情熱にみちた文章は青年の欣慕的であった。大正七年満鮮旅行をこころみ、十一年には「桂月全集」出版。「日本名山記」の刊行を

企て、全国の名山踏破を余生の仕事とし、十四年酒友児玉花外と陸奥山水跋涉を企て、六月焼山を廻り、折柄修学旅行中の室蘭中学生に講演するなど平生と変らぬ様子であったが、その夜吐血し、胃潰瘍と診断された。駆けつけた夫人子供に囲まれて最後の酒に舌鼓をうち、辞世の歌を残し、今李白と呼ばれた酒豪で気骨稜々たる生涯を閉じた。時は六月十日午前九時十五分。享年五十七歳。

風葉小栗磯夫は、明治八年二月三日愛知県知多郡半田村（現半田市）字荒古の薬種屋の長男に生まれた。父半左衛門、母ぎぬ。父は生真目な商売一途の人で、風葉の文学的素質は祖父の血をひいたらしい。幼少年時代から稗史小説類を濫読し、文士に憧れていた。高等小学卒業後薬剤師になる条件で上京を許され済生学舎に入學したが、密かに退学して錦城学校に入學した。そこで思軒、逍遙、蘇峰らの講義を聴き、青年文学会に出席して文学的視野を拡げた。紅葉が後進育成のために発行していた「千紫万紅」に処女作「水の流」を投稿して認められ、のち紅葉の指導を受けるようになった。二十五年錦城学校修了、第一高等中学文科を受験したが失敗、自暴自棄して不良少年的生活を送っていた。二十八年徴兵検査で帰郷、放縦な生活振りが知れて上京を禁じられたが紅葉のとりなしで上京を許され、春葉と共に紅葉の玄関子になった。二十九年から発表の場を得て本格的創作活動がはじまる。三十三年愛知県豊橋町の加藤倉次の養子となり長女壽子と結婚。三十年代のゾライズムの流行に新文学の将来を感じとった彼は創作の転機に立ち旧套の脱皮と摸索に悩んだすえ三十四年五月の「さめたる女」以下の三部作を発表。三十八年三月から読売新聞に連載した「青春」は大きな反響を喚びおこ

した。晩年は豊橋市の新邸に自適の生活を送っていたが宿痼が悪化して大正十五年一月十五日、五十歳の生涯を閉じた。

忍月石橋友吉は慶応元年九月一日、福岡県上妻郡湯辺田村の医家に、父茂、母ふくの三男として生まれた。生後間もなく父が死に、翌年叔父石橋養元（眼科医）の養嗣子となった。明治十六年大学予備門に入り、在学中から原稿を書き、「女学雑誌」に「妹と背鏡を読む」を投稿したのが最初である。二十年六月二葉亭の「浮雲」第一編が出ると「浮雲の褒貶」を書いて論評し、翌年第二編が出ると「浮雲第二編の褒貶」を書いた。ドイツ語に通じ西洋近代文学に親しんでいた彼の評論は逍遙、二葉亭、鷗外などの新しい文学に対して正しい理解を持ち、その批評は当時において一頭地を抜くものであった。二十二年一月「新小説」創刊の際同人となり「露子姫」等の小説を発表し、「江湖新聞」「国会」等に入って健筆をふるった。二十四年七月帝大独法科を卒業、内務省に入ったが、大臣品川彌二郎の辞職に殉じて退き、「北国新聞」に招かれて金沢に行った。三十二年再び上京、元田肇の法律事務所籍を置き、傍ら「新小説」の編集に従事していた。三十二年長崎地方裁判所判事として赴任、大正十五年二月一日、還暦の翌年その地で歿した。

（昭和女子大学近代文学研究室）

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑、金子健二の四先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさぞおよろこび下さるであろう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歳月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従って死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名